OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	関西の製品デザイン
Author(s)	高井, 一郎
Citation	デザイン理論. 1996, 35, p. 98-99
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53250
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

関西の製品デザイン

高井一郎／Kent Institute of Art & Design, Rochester upon Medway College

日本の近代化に一挙に突入した明治期は，主に欧米を見習った富国強兵策と，それにともなう産業を振興し発展させた時期と見ることが出来，製品全般も欧米の模倣が主だったが，その後の大正・昭和期に入ると，ある程度，日本人独自の考えで製品を作り出すことが出来るようになった。

この間，第一次大戦後の大不況や，1929（昭和4年）のアメリカ大恐慌の影響で，日本の産業全体が大打撃を受けたが，その後，第二次大戦の準備状況に入る昭和5～6年頃までの日本の産業，特に民需を中心とした関西の産業は，欧米の模倣をある程度脱し，独自の製品開発を展開したと見ることが出来る。

技術の発展は，産業と関係があり，その産業は政治・経済と密接な関係があるが，別の見方では，それは独自のストーリーをもっているとも言える。

関西の産業は，個人企業から発展したものが多く，それは，人々の生活や社会に必要なものに着目して独自の製品を作り出し，生活と産業のレベルを高めたと言えよう。

それらの主なものを拾ってみると，以下のように述べることが出来る。

1871年（明治4年），大阪に造幣寮が完成し，近代産業の基が築かれたが，京都に於いても，博覧会などが度々開催され勧業の役割を果たした。

京都の産業の発展に関しては，島津製作所が理化学・医療機器を次々に開発したことが特に注目されることであり，また織物業の近代化のために，京都西陣が行った様々な開発・努力が特筆されるべきであろう。

また，大阪に於ける紡績業の隆盛や，琵琶湖疎水路の新設・発電所の完成等も日本の産業発展に特別の意味をもつものであった。

1895年（明治28年），京都に於いては平安建都千百年を記念して岡崎一帯で第四回内国勧業博覧会が開催され産業振興に寄与するところ大であったが，大阪に於いても，汽車製造会社の国産蒸気機関車第一号製造，伊藤喜商店の特許新製品の発売など活発な活動があったことが注目される。

1912年～1926年（大正期）には大阪で国産第一号の魔法瓶が製造され，伊藤喜工作部はホチキス紙綴器第一号を製造，中山太陽堂はクラブ化粧品の近代工場を設立し，このとき既に意匠研究所を設け，デザインの実務を行っている。

また，松下電気器具製作所が設立され，差し込みプラグの生産を開始した。

この時期すでに鉄管メーカーとして地位を確立していたクボタ鉄工は，スチームエンジンを製造して米船に搭載し，さらに自動車の開発にも積極的に乗り出し，実用四輪自動車の製造にも成功した。

昭和期に入り，日本放送協会（ＮＨＫ）が設立されたが，大正12年の関東大震災のため大阪に移った早川電機は，日本初のラジオ受信機製造に成功し多くの製品を市場に出した。それは国内だけでなく，輸出製品としても大きい実績をあげた。

ダイハツ工業は，ガソリンエンジンを搭載した三輪自動車の開発に成功し，続いて広島の東洋工業もマツダ号三輪自動車を発表した。

昭和6年，松下電器産業は近代生産方式に

よるラジオ受信機の生産を開始し，デザイン・コンクールの実施などによって造形性・市場性の面でも卓越した。

昭和12年には，自転車およびその部品が，機械輸出のトップを占めるようになったが，国内においても自転車は大いに普及し庶民の足として，商用として盛んに用いられた。

また，ミノルタカメラはこの頃既に，国産初の二眼レフカメラや距離計連動カメラなどを発表していた。

このように，関西の諸産業は，この頃まで著しい発展をみせたが以後は優秀な技術を持つ企業ほど軍の指定を受けて軍需製品を生産するようになり，民生産業は著しく後退し，回復は戦後数年を経なければならなかった。